

幼児保育学科における「ピアノレッスンⅡ・弾き歌い」の科目評価について

Über die Bewertung des Faches „Klavierunterricht II Singen mit Klavierbegleitung“ in der Fakultät für Frühpädagogik

附田勢津子・田端 利則・佐藤 愛子
中嶋 栄子・橋本 知子・大久保 等

Übersicht Bei dem einjährigen Fach „Klavierunterricht II Singen mit Klavierbegleitung“ des 2. Studienjahrs an der Fakultät für Frühpädagogik unserer Universität geben in dem ein Mal wöchentlich stattfindenden Unterricht fünf Fachlehrer den Teilnehmern individuelle praktische Anleitung.

Die Bewertung des Faches findet auf Grundlage einer umfassenden Beurteilung statt, wobei der Schwerpunkt auf der „Prüfung des Singens von Kinderliedern mit Klavierbegleitung“ und der „Prüfung von Etüden- und Musikstücken“ liegt. Die „Prüfung des Singens von Kinderliedern mit Klavierbegleitung“ wird alle drei Monate durchgeführt, wobei aus „Liedern der Jahreszeit“ zwanzig Stücke als Prüfungsstücke ausgewählt werden. Es wird aber auch über die Prüfungsstücke, die im jeweiligen Jahr bei der Kindererzieherprüfung gestellt werden, eine Prüfung gemäß einem Standard durchgeführt, der von unserer Universität festgesetzt wird. Beim Gesangsteil wird dabei „Liedertext“ und „Tonintervalle“, und beim Begleitungsteil „Technik“ und „Ausdruck“ mit jeweils maximal zehn Punkten bewertet, und weiterhin als Gesamteindruck „Rhythmus“ mit maximal zehn Punkten und „Darstellung“ mit maximal zehn Punkten bewertet, so dass insgesamt also maximal sechzig Punkte vergeben werden. Das Ergebnis wird von den fünf Fachlehrern benotet und zusammengerechnet und der Durchschnittswert als Bewertung der praktischen Prüfung betrachtet.

Dieses Mal habe ich für meinen Bericht die Bewertungsergebnisse der „Prüfung des Singens von Kinderliedern mit Klavierbegleitung“ (Prüfungsstücke für die Kindererzieherprüfung) vom Fach „Klavierunterricht II“ des 2. Studienjahrs von acht akademischen Jahren von 2004 bis einschließlich 2011 analysiert.

1. はじめに

本学の幼児保育学科のピアノレッスンは開学以来個人のレベルに合わせたきめ細かな指導を展開してきた。保育専門職員の養成校として地域社会に貢献出来る保育者を育成するため、技術技能を獲得させるべく実践的な指導を図っている。現場のニーズに対応するために、これまで「ピアノ演奏の基礎技能」と「童謡の弾き歌い」の2つの側面から徹底した個別実技指導を継続させてきた。毎年ピアノ未経験の入学生が増え続ける中で、クラスを四段階のレベルに分割し、基礎的技能を重視した丁寧な指導を行っている。

本学幼児保育学科の2年次生の通年科目「ピアノレッスンII」は、5人の専門教員により毎週個別の実技指導が行われている。

この科目評価は、「楽曲の試験」と「童謡の弾き歌い試験」を中心に、受講態度を含め総合的に判断して評価している。「童謡の弾き歌い試験」は、『うたって、つくって、あそぼう』（幼児表現教育研究会編）から「季

節の歌」を20曲程度指定し、3カ月ごとに実施している。前・後期に行われる「楽曲の試験」の選曲は、学生とレッスン担当者が相談し決めている。

その年度の「童謡の弾き歌い試験」は、保育士試験に出題された課題曲を課し、本学で設定した基準で実施している¹⁾。その評価方法は、歌唱部分について「歌詞」と「音程」、伴奏部分について「技術」と「表情」、また全体的印象として「リズム」「表現」をそれぞれ10点満点で評価したものを合計した60点満点で5人の専門教員が採点し、その結果を平均した値で実技試験評価としている。

今回、本学科の三つのポリシーの一つとなっている音楽重視の教育目的を取り上げ、2年次生に行われた「ピアノレッスンII」の「童謡の弾き歌い試験」（保育士試験課題曲）について、2004年度（平成16年度）から、2011年度（平成23年度）まで8年間の評価結果を分析した。

2. 2004年度（平成16年度）から2011年度（平成23年度）までの評価結果

表1に、2004年度（平成16年度）から2011年度（平成23年度）まで、「童謡の弾き歌い試験」の受験者数と、「童謡の弾き歌い試験」で出題した課題曲名を示した（受験者数は、試験当日の欠席者を含まない為、在学者数とは異なる）。

また、表2、図1に、2004年度（平成16年度）から2011年度（平成23年度）まで、8年間の「ピアノレッスンII」の「童謡の弾き歌い試験」の評価結果を示した。

表中の値は、5人の審査員の平均値である。

表 1 「ピアノレッスンⅡ」 「童話の弾き歌い試験」 受講者数、課題曲（2004年度-2011年度）

年度	科目受講者数	課題曲 1	課題曲 2
2004年度 (平成 16 年度)	113 名	ありさんのおはなし	空にらくがきかきたいな
2005年度 (平成 17 年度)	124 名	とんぼのめがね	イルカはザンブラコ
2006年度 (平成 18 年度)	123 名	ふうせん	サッチャン
2007年度 (平成 19 年度)	98 名	まつぼっくり	幸せなら手をたたこう
2008年度 (平成 20 年度)	99 名	とんぼのめがね	はたけのポルカ
2009年度 (平成 21 年度)	85 名	ぞうさん	さんぽ
2010年度 (平成 22 年度)	83 名	ちょうちょう	とんでったバナナ
2011年度 (平成 23 年度)	93 名	思い出のアルバム	あめふりくまのこ

表 2 「ピアノレッスンⅡ」 「弾き歌いピアノ演奏試験」 2004年度～2011年度、評価の平均（評価員 5 人の平均値）

	全体的印象		歌唱		伴奏	
	表現	リズム	歌詞	音程	技術	表情
2004年	4.76	6.59	6.49	6.65	6.64	6.73
2005年	4.29	6.05	6.05	6.24	6.50	6.50
2006年	4.82	6.37	6.43	6.74	6.36	6.44
2007年	6.28	8.17	8.07	8.75	8.56	8.43
2008年	5.75	7.50	7.66	7.73	8.51	8.37
2009年	6.00	7.97	7.93	8.41	8.01	7.91
2010年	6.12	8.01	7.88	8.57	8.07	7.55
2011年	6.71	8.45	8.11	8.77	8.46	8.38

2004年度～2011年度の評価平均の比較グラフ

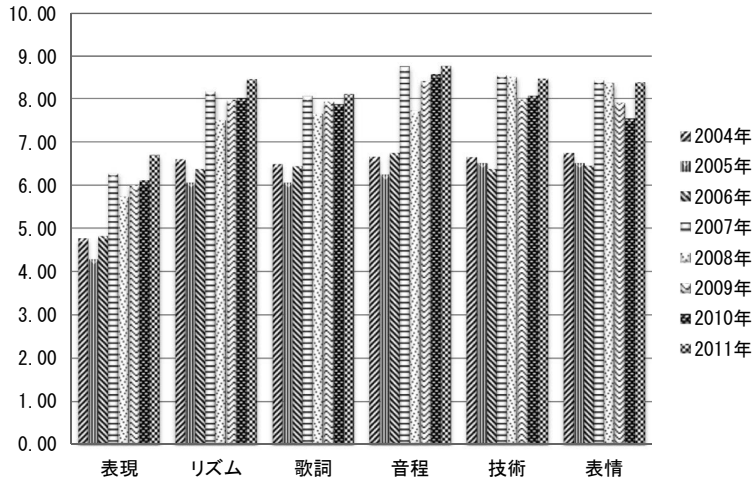


図1 「ピアノレッスンII」 「弾き歌いピアノ演奏試験」の評価平均結果、年度比較グラフ

3. 評価結果の考察

3-1. 全体的結果の考察

(1) 評価結果を見ると、総ての年度を通じて「全体的印象」の中の「表現」の得点が他の項目に比べて極端に低いのが目立っている。

この理由としては、初めてピアノ演奏を習う学生が多いため、音を間違わずに演奏することに注意が集中して、豊かな表現を演出するところまで、学生の余裕がなかったことが考えられる。また、本学科学生の出身地として、青森県南部地方、岩手県北部地方出身者が多いという当地域の地域性も影響していると考えられる。当地域の出身者は関東や関西など、他の地域の出身者に比べて、物事に真面目にコツコツ取り組み、困難な状況に対して忍耐強いが、自分から進んで人付き合いを始めるというような社交性や積極性に欠ける、人当たりが良くない、という評価を受け

ることが多い。その為、パフォーマンス的演技力が必要になる「童謡の弾き歌い試験」に演出的効果を付ける「表現」は苦手になっている傾向がある。これは、ピアノ演奏試験の前に「表現」を付けるように事前指導しても、直ぐに行動に移すことができない類のものであると考えられる。

(2) 総ての項目の評価において、2004年度（平成16年度）から2006年度（平成18年度）までの得点に比べて、2007年度（平成19年度）以降の得点が高くなっている。これは、保育士試験課題曲は、これまで高度な曲を課されていたのであるが、2007年度以降は、保育士試験に出題される課題曲はそれ以前の課題曲に比べて技術的に難易度が低いものになったためと考えられる。具体的には、それ以前の課題曲に含まれていた、シンコペーション、リズムの反復、音程の跳躍

による指使い、3拍子の伴奏付け、旋律と伴奏のリズム運動等の技術が即応出来ないレベルにある学生が多かった為である。2007年度以降は、学生もよく知っている、現場で活用されている課題曲が出題されるようになったため、得点が高くなったと思われる。

3-2. 審査項目間の考察

(1)「童謡の弾き歌い試験」課題曲の審査において、「歌唱」部分については「歌詞」と「音程」、「伴奏」部分については「技術」と「表情」をそれぞれ10点満点で評価し、また「全体的印象」として「リズム」と「表現」を10点満点で評価し、それらを合計して60点満点で採点しているのであるが、この審査項目間において、何らかの相関関係が無いかを調べてみた。

2005年度から2011年度まで1年おきの審査結果の相関係数の表を表3-1～表3-4に示す。その結果、全般的傾向として、相関の強い順に、①「伴奏」部分の「技術」と「表情」、②「伴奏」の「表情」と「全体的印象」の「リズム」、③「伴奏」の「技術」と「全体的印象」の「リズム」、④「歌唱」の「歌詞」と「全体的印象」の「表現」、⑤「全体的印象」の「リズム」と「表現」の順番になる傾向がみられる。特に、①「技術」と「表情」、②「表情」と「リズム」、③「技術」と「リズム」は相関が強く、各年度の課題曲の評価において、必ず5番以内の相関を示している。

これは、「童謡の弾き歌い試験」においては、「伴奏」の「技術」がそのまま「伴奏」の「表情」に影響していること、「伴奏」の「表情」や「技術」が「全体的印象」の「リズム」に影響すること、「歌唱」の「歌詞」が明確な

場合、それが「全体的印象」の豊かな「表現」に繋がること、「表現」と「リズム」は関連があることを示した結果だと考えられる。

ちなみに、相関係数は、お互いに関連があると思われる2項目間のデータの変化において、相関係数が1ならば「最も強い相関があり」、0ならば「相関無し」、-1ならば「最も強い負の相関がある」といわれ、0.7以上は「強い相関がある」といわれる。

3-3. 各審査項目の年度変化の考察

(1)「童謡の弾き歌い試験」の評価結果(図1)において、「評価平均の年度比較グラフ」を見ると、2007年度を除いて、「歌唱」部分の「歌詞」と「音程」、「全体的印象」の「表現」、「リズム」とも、5人の審査員の得点平均が段々と高くなっているのが分かる。一方、「伴奏」部分における「技術」と「表情」の評価は、2004年度から2006年度と2007年度以降で評価に大きな違いがあるとはいえ、数年間あまり変わらない評価になっている(却って、2004年度から2006年度まで得点平均が下降傾向にあり、また2007年度から2010年度までも同じく得点平均が下降傾向にある)。これは2005年度からの入学生において、入学時のピアノ初心者のおよそ60%以上であり(平均65%)、2011年度に至っては、ピアノ初心者の割合が80%を越えた影響が出ていると思われる(別論文「八戸短期大学に於ける音楽教育の指導」附田勢津子、他著参照)²⁾。

次に、各評価項目別に2004年度から2011年度までの変化を考察する。

まず「歌唱」部分の点数が年々上がっている理由の一つとしては、小・中・高校が「詰

表 3-1 2005 年度 評価項目の相関係数

課題曲①の相関係数							① リズム-表情 ② 技術-表情 ③ リズム-技術 ④ 歌詞-表現 ⑤ リズム-音程
リズム	歌詞	音程	技術	表情	表現		
リズム	1						
歌詞	0.520792974	1					
音程	0.726025164	0.658979564	1				
技術	0.856389752	0.448003786	0.60586756	1			
表情	0.914703502	0.491039395	0.647103431	0.914078348	1		
表現	0.646872677	0.748943943	0.637781388	0.545796925	0.604369626	1	

課題曲②の相関係数							① 技術-表情 ② リズム-表情 ③ リズム-技術 ④ 歌詞-音程 ⑤ リズム-表現
リズム	歌詞	音程	技術	表情	表現		
リズム	1						
歌詞	0.49529491	1					
音程	0.633424213	0.729381304	1				
技術	0.788613164	0.418622013	0.569512273	1			
表情	0.877142172	0.360550409	0.549126738	0.884097751	1		
表現	0.69280715	0.662075962	0.643256199	0.569097481	0.590811916	1	

表 3-2 2007 年度 評価項目の相関係数

課題曲①の相関係数							① 技術-表情 ② リズム-表情 ③ 表情-表現 ④ リズム-表現 ⑤ リズム-技術
リズム	歌詞	音程	技術	表情	表現		
リズム	1						
歌詞	0.520800103	1					
音程	0.739923205	0.570419452	1				
技術	0.78863968	0.566194571	0.572174002	1			
表情	0.88029923	0.543828769	0.650134544	0.93151796	1		
表現	0.794108602	0.765616079	0.693906441	0.781517778	0.805381559	1	

課題曲②の相関係数							① 技術-表情 ② リズム-表情 ③ リズム-技術 ④ 歌詞-表現 ⑤ リズム-表現
リズム	歌詞	音程	技術	表情	表現		
リズム	1						
歌詞	0.638080418	1					
音程	0.70397926	0.704295657	1				
技術	0.823422325	0.623640909	0.654430304	1			
表情	0.88704564	0.600425574	0.675951389	0.937339872	1		
表現	0.814806914	0.816695853	0.783087693	0.766459386	0.785662477	1	

表 3-3 2009 年度 評価項目の相関係数

課題曲①の相関係数							① 技術-表情 ② リズム-表情 ③ リズム-技術 ④ 歌詞-音程 ⑤ 歌詞-表現
リズム	歌詞	音程	技術	表情	表現		
リズム	1						
歌詞	0.634875464	1					
音程	0.738753127	0.8620352	1				
技術	0.897368622	0.457833344	0.597065979	1			
表情	0.932247096	0.544519731	0.667735447	0.949408014	1		
表現	0.795502569	0.846512934	0.841525218	0.65707374	0.731402611	1	

課題曲②の相関係数							① 技術-表情 ② 歌詞-音程 ③ リズム-表情 ④ リズム-技術 ⑤ 歌詞-表現
リズム	歌詞	音程	技術	表情	表現		
リズム	1						
歌詞	0.660582047	1					
音程	0.704169141	0.906945604	1				
技術	0.881423384	0.650904045	0.708407151	1			
表情	0.885517375	0.701039126	0.737558938	0.967401989	1		
表現	0.837624718	0.856108613	0.851430172	0.824862209	0.839565135	1	

表 3-4 2011 年度 評価項目の相関係数

課題曲①の相関係数							① 技術-表情 ② リズム-表情 ③ リズム-技術 ④ 歌詞-表現 ⑤ リズム-表現
リズム	歌詞	音程	技術	表情	表現		
リズム	1						
歌詞	0.585154903	1					
音程	0.704008334	0.511205384	1				
技術	0.868275461	0.502422609	0.632901753	1			
表情	0.894767643	0.534432738	0.628431386	0.953735094	1		
表現	0.747360544	0.76686086	0.604727381	0.65677364	0.696032527	1	

課題曲②の相関係数							① 技術-表情 ② リズム-表情 ③ リズム-表現 ④ 歌詞-表現 ⑤ リズム-技術
リズム	歌詞	音程	技術	表情	表現		
リズム	1						
歌詞	0.603296665	1					
音程	0.725439765	0.615355131	1				
技術	0.743390205	0.41831486	0.585256594	1			
表情	0.820731435	0.48958499	0.604838277	0.92797999	1		
表現	0.769843436	0.753070136	0.705033535	0.663708246	0.709637649	1	

め込み式の知識重視の教育」から「ゆとり教育」が取り入れられた際に、総合学習の時間などで、グループ学習やボランティアを含む学外活動、発表を伴う自己表現力を伸ばす教育が積極的に採用され、本学科の入学生も「童謡の弾き歌い」の「歌唱」に対して抵抗感が無くなってきている結果ではないかと考えられる。それが「全体的印象」の「表現」や「リズム」得点の上昇に繋がっているのではないかと考える。

次に、そのような「歌唱」部分での得点の上昇傾向がみられるのに、「演奏」部分の得点が伸び悩んでいる理由は、「ピアノ演奏」という技術的なものは、幼いころから慣れ親しんできたかどうか、入学時に初めてピアノ演奏に取り組んだ学生が、在学中毎日のように練習していたかどうかの影響するため、「演奏」部分の点数に影響した結果だと思われる。却って、在学中に学ぶ他の学科目から課される課題や宿題が増えれば、物理的に学生が自由時間を使ってピアノ練習する時間が減り、音楽の得点が年々下降傾向になったとも考えられる。

なお、2007年度の評価平均は、他の年度に比べて大変高い点数になっている。これは、別論文「八戸短期大学に於ける音楽教育の指導」（附田勢津子、他 著）²⁾で示したように、この年度の学生の中に、小・中・高校時代にピアノを習ったことがある学生の割合が他の年度に比べて大変多かったからである（2007年度の入学生の中で、バイエル教則本レベル以上の学生割合が48%を占めていた。例年は35%前後である）。

3-4. 得点別人数割合の考察

(1) 各年度の得点別人数割合について、図2に示した（2005年度から2011年度まで、1年おきに示してある）。

これをみると、2005年度から2011年度まで、全体的に平均点が上がってきているのが分かる（但し、2007年度は課題曲の難易度の変更があり、また2007年度に限ってはバイエル教則本レベル以上のピアノ技術を持った学生の入学割合が高かった為、それ以前と比べて、急に評価点数が伸びたということがあった）。この理由としては、教員の教育技術の向上や学生自身の学ぶ意識の向上（以前に比べて、遅刻、欠席する学生が減った、など、大学を取り巻く社会の目が厳しくなっていることが背景にあり、大学自身も自己点検を行って、教員の授業運営方法の相互点検、教育技術の向上や、学生の学習意欲の向上に努めている）が挙げられる。

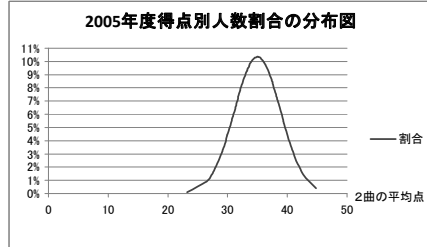
標準偏差は、各年度とも4点から6点前後である。これは、他の社会人試験の結果や他学の結果と比較してみないと分からないが、本学科においては、年度によって、また学生の資質の差によって大きなばらつきがあるとは言えない。

(2) 各年度の男女別得点人数割合について、図3に示した（2005年度から2011年度まで、1年おきに示してある。但し、男子学生の得点人数割合の分布図において、成績データは通常正規分布すると云われるが、各年度の男子学生数が少ないため（各年度、6名から14名の範囲であった）分布図は滑らかな曲線を描けなかった）。

これをみると、女子学生のほうが男子学生より全般的に4点から5点、平均点が高い（但

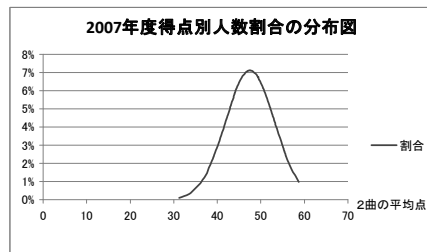
① 2005年度得点別人数割合

受験学生数 124名
平均点 35.0点 標準偏差 3.9



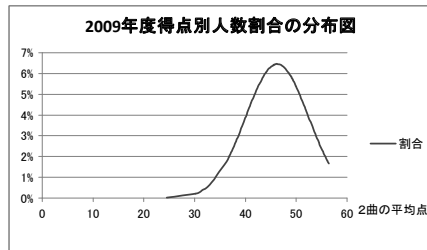
② 2007年度の得点別人数割合

受験学生数 98名
平均 47.5点 標準偏差 5.6



③ 2009年度得点別人数割合

受験学生数 85名
平均 46.2点 標準偏差 6.2



④ 2011年度得点別人数割合

受験学生数 93名
平均 48.9点 標準偏差 4.8

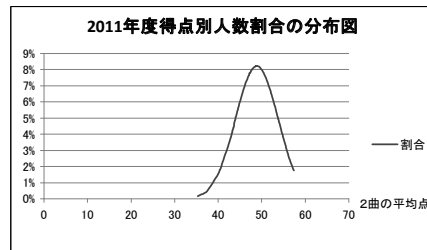
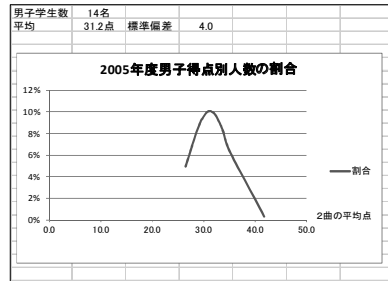
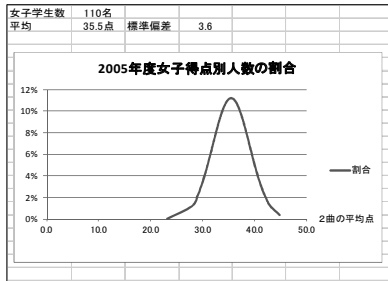
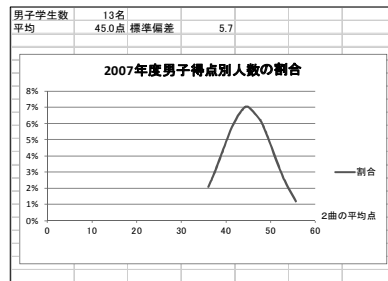
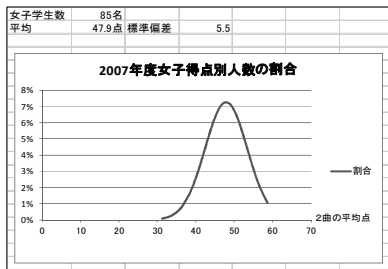


図2 年度毎の得点別人数割合のグラフ (2005年度-2011年度、隔年)

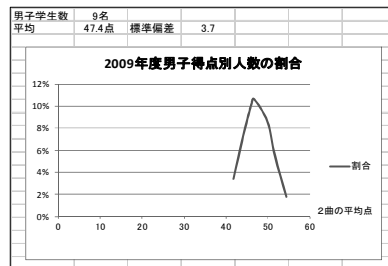
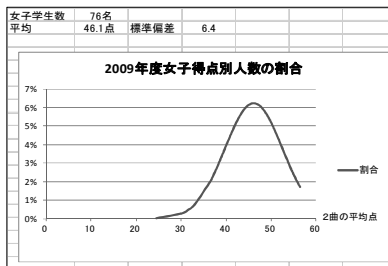
① 2005年度の男女別得点人数の割合



② 2007年度の男女別得点人数の割合



③ 2009年度男女別得点人数の割合



④ 2011年度男女別得点人数の割合

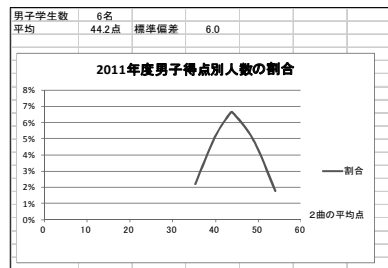
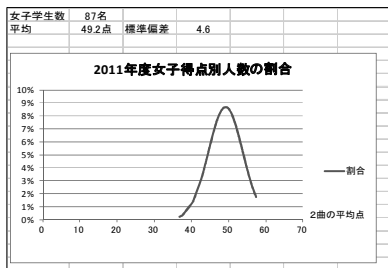


図3 年度毎の男女別得点人数割合のグラフ (2005年度-2011年度 隔年)

し2009年度は男子学生のほうが女子学生より1点以上平均点が高くなっており、この原因は、特に得点の低い女子学生のグループが女子学生全体の平均点を押し下げてしまった為である)。この理由としては、女子のほうが男子に比べて、一般的にこつこつと反復練習を繰り返す技術の習得を行う傾向にあるこ

とが挙げられる。

標準偏差をみると、各年度とも3点台後半から6点台であり、本学科としては、年度別のばらつき、学生の資質による大きなばらつきがあるとは言えない(但し、2009年度の女子のばらつきは、他の年度の女子学生や男子学生に比べて一番大きくなっている)。

4. 今後の課題

(1) 保育士試験に出題される「童謡の弾き歌い試験」課題曲は、他の短期大学でも「ピアノレッスン」科目の実技試験課題曲として使われている可能性があり、青森県や他県の短期大学の評価結果と比較分析してみたいと考えている。

(2) 入学時点で小・中・高校時代にピアノを習ったことがある学生がおり、この種の学生が入学生の中に多い年度は、結果として2年次の実技試験である「童謡の弾き歌い試験」の評価が高くなることになる。本学科では、この種の学生には、在学中にもっと研鑽を積んで貰う為に、入学前までピアノを習った事がない学生とは別メニューの難易度の高い課題を与えている。入学前にピアノを習ったことがあるかどうかは、入学時にアンケー

ト調査で把握しており、入学前にピアノの学習経験があるかどうかで分類して、2年次にどの程度まで習得技術が向上したのかの分析は、別論文「八戸短期大学に於ける音楽教育の指導」(附田勢津子、他 著)²⁾で検討した。

しかし、入学時のピアノ初心者、卒業時に相当程度まで童謡の弾き歌い技術が向上する学生と停滞する学生に分かれる理由についての考察が不十分であり(つまり、授業の中で教員の指導を受けていさえすれば何とかなる、という甘えなのか、与えた課題がピアノ初心者の学生にとって的確か否か、学生個人の資質によるのか、学生の置かれたアルバイト等を含む経済的環境なのか)、その主要理由について今後検討したいと考えている。

5. 参考文献・参考資料

- 1) 保育士試験 「弾き歌い演奏試験 課題曲」 2004年～2011年
- 2) 「八戸短期大学に於ける音楽教育の指導」 八戸短期大学研究紀要 第36号